

日本の種子学を確立した 近藤 萬太郎



近藤萬太郎（1883-1946）は初代所長として研究所の設立、運営に多大な貢献をただけではなく、日本の種子学を確立しました。各種農作物の種子の形態、記載、幼苗による品種鑑識、種子の寿命と貯蔵、種子の発芽生理などの研究において多大な業績を残しました。1933年と1934年に出版された「日本農林種子学」前・後はその優れた業績の集大成です。1927年に日本農学賞を受賞され、1929年に天皇陛下当地方行幸の折には、「稲および米」と題する御前講演を行いました。デンマークのコペンハーゲン種子検査所長トルフペーテルゼン博士、ドイツのノッペ博士とともに世界の三大種子学者と呼ばれていました。当時収集した117科880種3374点の種子は現在も研究所で良く保存されており、つい最近本研究所榎本敬准教授によってデータベース化されました。

(<http://www.rib.okayama-u.ac.jp/wild/kondo-seed/kondo-seed-Top.html>)

近藤は岡山県邑久郡豊村五明（現在岡山市東区西大寺）の生まれで、6歳の時に父を亡くし、母の手一つで育てられました。当時、母にいつも「父さんがいないといって力を落としてはなりません、勉強してお国のお役に立つ人間になりなさい」と繰り返し教えられました。近藤少年はこの教えをしっかりと守り、毎日午前3時に起床し、提灯を手に自宅から岡山尋常中学校（現在岡山県立朝日高等学校）までの三里半（14km）を歩いて、通学していました。地元の人には「邑久郡の汽車」というニックネームがついて、人々は彼の提灯で夜明けの時刻を知りました。

第六高等学校時代に、大原孫三郎と親交があり、大原氏に農業分野への道を進められました。東京帝国大学大学院で種子学を専攻し、また大原氏の後援のもとドイツのベルリン農科大学とホーエンハイム農科大学に留学しました。1914年の帰国後、大原氏に会い、「私はドイツで勉強しているうちに、日本の農業が根本的に少しでも学問的な基礎を持っていないことに気がついていたのです。これでは人を教えようにも、教える先生が居らないようなものではないでしょうか？」「われわれは実験圃場を持って、自らの手で、日本農業のあり方、改革の方向を探し求めて行かねばならないと思えます」と感想を述べました。この思いが大原氏に伝わり、当初の意図と少し違った研究所が生まれたと想像します。

近藤は研究一筋で、責任感の強い人柄でした。戦時中、空襲の時には鉄カブトをつけて夜でも必ず研究所へ駆けつけました。空襲が激しく、疎開を進められたときには、「君たちは疎開するがよい、自分は30年来親しんでいる研究所の土地が運ばれない限り疎開するわけにはいかない」と疎開を聞き入れませんでした。

近藤はまた家族思いの人です。宴席に出された当時高級な「マスカット」を妻子に食べさせるためにハンカチに包んで家に持ち帰ったそうです。晩年の近藤は戦争や農地改革で多難な時期に遭いました。そして、1946年に64歳の若さで病死しました。（馬 建鋒 分館長編集）

（近藤萬太郎に関する詳細な伝記は榎本先生が執筆した文章をご参照ください）<http://www.rib.okayama-u.ac.jp/profile/ijinden/kondo.doc>